

名誉員推薦

(写真：敬称略)



白鳥 則郎

推薦の辞

白鳥則郎君は、昭和52年に東北大学大学院工学研究科博士課程を修了され、同大学電気通信研究所に助手として勤務されました。昭和59年に同大学電気通信研究所助教授、平成2年同大学工学部情報工学科教授を経て、平成5年同大学電気通信研究所教授に就任されました。平成22年に東北大学名誉教授・同大学電気通信研究所客員教授、公立ほこだて未来大学理事、平成24年4月から早稲田大学大学院国際情報通信研究科教授となり現在に至っております。

研究に関して同君は、情報と通信に関する分野に取り組み、四つの研究、すなわち情報通信システムの「知識型設計開発支援システム」、「やわらかいネットワーク」、人とコンピュータの調和及び人の暮らしと自然の共生へ向けた「共生コンピューティング」、更に災害に強い「ネバーダイネットワーク」を推進し、それぞれの分野を先導し切り開いたパイオニアです。

特に、通信と人工知能を統合した「知識型設計方法論」を提唱し、情報ネットワークのプロトコルからアプリケーションサービスまでの設計過程を系統的に支援できることを実証しました。その成果は、IEEE JSAC「特集：通信網におけるAI」（1988年）の15編の論文中の3編の論文として採択され、同分野を先導するパイオニアの研究として世界的に高く評価されています。

また1994年に、ネットワークの内部と外部の変化に能動的に対応できる「やわらかいネットワーク」の概念を提唱し、従来のネットワークアーキテクチャに「やわらかいネットワーク層」を導入して実装することにより、やわらかいネットワークの実現に成功しました。その後、このやわらかいネットワーク層は、ネットワークミドルウェアと呼ばれ、世界的に定着し普及しております。

1990年代初期に提案した「共生コンピューティング」の概念では、人の暮らしと自然の共生へ向け、省エネルギーを目指した「グリーン指向」情報通信システムの研究を先導し、2011年に広域分散地域コミュニティにおける実証実験（総務省・栗原グリーンプロジェクト）を成功に導いております。

更に2003年に「ネバーダイネットワーク」の概念を提唱し、2011年の東日本大震災以降に盛んとなった災害に強い情報通信システムの先駆的な研究を推進、その独創性・先見性は内外から高く評価されています。

同君はまた、総務省などの受託研究として多くの産学連携プロジェクトを先導し、特に次世代ネットワーク管理に関する研究成果を進展させ、インターネットの標準化を扱っているIETFに提案し、2件の国際標準化に成功しております。

本会では、情報ネットワーク研究専門委員会委員長、人工知能と知識処理研究専門委員会委員長、通信ソフトウェア時限研究専門委員会委員長、評議員、東北支部長などを歴任され、学会の活性化と運営に尽力されました。更に情報処理学会会長、IFIP日本代表、IEEE Sendai Section Chair、日本学術会議連携会員、人工知能学会理事として、情報の分野においても学術の発展に大きな貢献をされております。

これらの業績に対して、これまで本会から論文賞、業績賞、功績賞、フェロー等を、また文部科学大臣表彰、IEEEフェロー、情報処理学会フェロー、同学会論文賞・功績賞、テレコムシステム技術賞等、数多くの賞を受賞されております。

以上、本会並びに国内外の関連学会における活動による電子情報通信技術の発展に寄与された功績は極めて顕著であり、ここに本会の名誉員として推薦致します。



津田俊隆

推薦の辞

津田俊隆君は、昭和45年東京大学工学部電子工学科を卒業、昭和50年同大学院工学系研究科電気工学専攻博士課程を修了され、その後、(株)富士通研究所に入社されデジタル信号処理に関する研究に従事されました。昭和53年から1年間、客員研究員としてカリフォルニア大学バークレイ校に滞在され、平成元年(株)富士通研究所情報通信研究部長、平成12年に同社取締役、平成13年に同社取締役(兼)欧州富士通研究所社長、平成17年に同社常務取締役、平成18年同社常務取締役(兼)米国富士通研究所会長を歴任され、平成22年同社フェローとなりました。平成24年4月から早稲田大学大学院国際情報通信研究科教授として後進の指導に邁進しておられます。

同君は、富士通研究所に入社以来、長年にわたりデジタル信号処理技術並びにその応用に関する研究開発に取り組まれ、デジタルモデム、SDH/SONET、並びにISDNシステムの実用化に大きく貢献しました。昭和50年代には世界最高速の高性能DSP(Digital Signal Processor)を設計し、フルプログラミングDSPによる4,800 bit/s デジタルモデムを実現しました。このDSPの先進的なアーキテクチャにより、その後の音声・画像通信システムや携帯電話など、DSP及びデジタル信号処理技術の応用領域は大幅に拡大しました。昭和60年からは広帯域通信技術の国際標準化を行うCCITT(現ITU-T) SG18のSDH/SONET関連勧告のドラフトメンバーとして活躍され、G.707-709などの技術勧告策定に重要な役割を果たすと同時に、その後のSDH/SONETや、国内のみならずシンガポールや北米向けISDNシステムの構築とその実用化に多大な貢献をなされました。

昭和62年からは広帯域マルチメディア通信を活用するための主要技術として画像コーデックの標準規格策定に深く関わり、ISO/IEC MPEG(Moving Picture Experts Group)のコアメンバーとして、デジタル放送

やDVDに広く適用されているMPEG規格(ITU勧告H.262ほか)の策定に大きく貢献されました。特に、動きベクトル効率探索方式を発明し、これはMPEG標準規格を実現する上での必須技術となっています。平成9年からはビデオオンデマンド技術等の標準を策定するDAVICの運営委員会メンバーとして画像関連の数々の技術開発に大きく貢献しました。また、情報通信審議会情報通信技術分科会ITU-T部会、同研究開発戦略委員会、インターネット利用高度化委員会、研究開発・標準化戦略委員会等、総務省情報通信審議会配下の多くの委員会や標準化関連委員会へ参画し、国際規格のTTC標準への反映に貢献しました。これらの業績により同君は平成11年に日本ITU協会賞、平成20年に情報通信技術委員会総務大臣賞を受賞されています。

その後WDMや10~100 Gbit/sなどの光通信システムの早期実用化、第3世代以降の携帯電話の実用化、次世代ネットワークなど、通信分野全体についての研究推進に尽力されるとともに、近年は環境問題などを含めた次世代ICTのあり方について幅広く活動されています。このような永年にわたるデジタル信号処理技術関連の研究開発における貢献と功績に対して、本会、並びにIEEEからフェローの称号を授与されています。

また学会活動においては、会計理事として学会収支の抜本的改善のため論文誌の電子化やソサイエティの独立採算化推進に貢献されるとともに、図書館の電子閲覧制度を進められました。更に企画・調査理事としてはフェロー制度の運用開始に尽力されました。その後、副会長及び会長を歴任され、学会Webシステムの再構築や国際化推進、並びに省庁連携の強化や支部組織の活性化推進など、ICT分野における研究開発の推進のみならず、学会運営の活性化に多大な貢献をなされました。

以上のように、本会、並びに国内外の関連学会や標準化団体における活動による電子情報通信技術の発展に寄与された功績は極めて顕著であり、本会の名誉員として推薦致します。